Osaka University Knowledge Archive

Title	「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」とユーラシア大陸
Author(s)	今泉, 奏; 竹中, 詩穂; 方, 園 他
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2016, 12, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62167
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」とユーラシア大陸

今泉奏・竹中詩穂・方園・森下瑶子

はじめに

本稿は、いわゆる「ローマの平和（パクス＝ロマーナ、Pax Romana）」と呼ばれる時期のローマ帝国について、そうした慣用表現の背後に潜む価値観や、帝国の歴史的実態を明らかにし、最新の研究動向を組み込んだ新たな教科書記述のあり方を提言するものである。

「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」とは、紀元前 1 世紀末頃から紀元後 2 世紀頃（アウグストゥスから五賢帝に渡る約 200 年間）の時期に、ローマ帝国の支配下における地中海世界が繁栄し平和であったことを表す言葉である。これに倣って、ある時代における強大な勢力による広域的な平和状態を「パクス＝〇〇」という言葉を用いて表すようになった。「パクス＝モンゴリカ」、「パクス＝ブリタニカ」、「パクス＝アメリカーナ」等がその例であり、各時代の覇権を象徴的に表す言葉として盛んに用いられている。このような慣用表現を生み出したという点で、「ローマの平和」は重要な概念であると言える。

しかし、当然のことながら、「ローマの平和」期の時代状況はこの言葉から想起されるほど単純なものではない。一定の安定や平和状態が保たれたことは事実だが、帝国の辺境では度々反乱が起こり、外部勢力との戦争も断続的に行われていたのである。それにもかかわらず、なぜこの時期が「ローマの平和」と呼ばれ、平和と繁栄の側面ばかりが強調されてきたのだろうか。その背景には、当該期のローマ帝国による支配を「平和」とみなす価値観が存在していたと考えられる。

本稿の課題は、紀元前 1 世紀末頃から紀元後 2 世紀頃を「ローマの平和」と表現することの背景にある価値観を析出し、それを相対化することである。その際、《ユーラシア大陸のなかのローマ帝国》という視角を導入し、近年研究が進んできている環境史の成果に注目する。

ここで、章ごとの目的を述べておこう。第 1 章では、現在の高校世界史 A の教科書において「ローマの平和」がどのように記述されているのかを比較分析し、その特徴を明らかにする。そして、それをもとに本稿における問題設定を行う。第 2 章では、ローマ帝国に対する関心や評価の移り変わりを中世から近現代まで追い、「ローマの平和」に対する価値観の変遷を分析する。それによって現在の高校世界史教科書における記述の背景を明らかにする。第 3 章では、「ローマの平和」期のローマ帝国の状況について、特に都市の繁栄と経済活動に注

目して概観する。第 4 章では、《ユーラシア大陸全体のなかのローマ帝国》という視角をもとに、「ローマの平和」期における帝国の「繁栄」が、いかなる世界史的状況のなかで存在していたのかを検討する。

以上の検討により、「ローマの平和」という言葉に含まれている価値観を相対化し、当該期のローマ帝国の実像を提示する。そして、最新の研究動向を教科書にどのように反映すればよいのか、「ローマの平和」に関する新たな教科書記述のあり方を提言したい。

第 1 章　教科書における「ローマの平和」

(1) 教科書の比較

本章では、高校世界史教科書における「ローマの平和」に関する記述のあり方を検討する。具体的には、2006 年度検定版の「世界史 A」の教科書（4 冊 3 出版社）について、以下の観点に基づきそれぞれの記述の特徴を明らかにする。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」の用語自体の有無とその評価

b.）当該期のローマ帝国に関わるその他の言及

c.）ユーラシア大陸の共時性に関する記述

最初に、帝国書院『明解　新世界史 A　新訂版』について検討する [1]。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」はゴチック体になっておらず、さほど重要視されていないようである。また、「賢明な多くの皇帝」の支配によって「繁栄を極め」たとの記述があるが、繁栄の具体的な中身については触れられていない。

b.）「奴隷」がゴチック体で記され、「奴隷に支えられた社会」というコラムがある。これは「ローマの平和」が誰にとっての「平和」であったのかを考えさせる効果を狙ったものであろう。

c.）第 1 部に陸・海の交易路を示した地図がある。また、「東アジアともう一つの勢力」の項で「絹の道」について言及しており、見開きのコラム「物を通して見る世界史」でも 2 世紀の絹の輸送ルート及びローマでの消費について詳細に記されている。

続いて、第一学習社『世界史 A』について考察する [2]。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」にゴチック体を用いており、比較的重要視されているようである。「五賢帝」時代は「ローマの最も栄えた時期」と表現される。しかし、その具体的内実についての記述はない。また、巻頭および後の章で「パクス＝ブリタニカ」、「パクス＝アメリカーナ」についての記載があり、近代の覇権国家を中心とする世界の状況を説明するために「パクス＝○○」という用語が用いられている。

---

[1] 岡田勝世・近藤一成・伊藤定良ほか 2014。

[2] 向山宏・秋田茂・石井修ほか 2014。

b.）当該期のローマ帝国に関するその他の記述は特にみられない。

c.）起源初期のユーラシア大陸の文化圏を示す地図、草原の道・オアシスの道・海の道を示した地図がある。しかし、紀元初期のユーラシアの共時性に関する記述は見当たらない。

次に、山川出版『現代の世界史』の比較を行う[3]。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」という単語は用いられておらず、重要視されていない。

b.）インド・中国との交易といった経済的側面や、ローマ法を始めとする文化的側面でのローマ帝国の発展について言及されている。

c.）「東西世界の交流」の章において海上交易を通じたユーラシア大陸の交流に言及している。この部分では交易が「古くからひらけ」ていたことが示されているが、特定の時期や場所については記述されていない。そのため、漠然とムスリム商人中心の東西交易のイメージが提示されるにとどまっている。

最後に、山川出版『世界の歴史』について検討する[4]。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」はゴチック体ではなく、さほど重要視されていない。また「ローマの平和」に関して「安定した時代」で「繁栄がつづいた」との表現があるが、具体的な内容には触れていない。

b.）当該期のローマ帝国に関するその他の記述は特にみられない。

c.）第 2 章「ユーラシアの交流圏」で「海の道」に言及し、南インド出土のローマ銀貨が紹介されている。しかし、紀元初期の交流については詳しく述べられているわけではない。

以上の分析をもとに、先の観点に即して高校世界史 A の教科書における「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」関係記述の特徴をまとめておこう。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」の重要性は各教科書でばらつきが存在している。しかし、用語そのものは山川出版社の『現代の世界史』を除くすべての教科書に記載があるため、教科書記述においても一定の重要性が認められていると判断される。

b.）当該期のローマ帝国の社会状況そのものについては言及がなく、「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」の内実についてはほとんど記述がなされていないと言える。

c.）ユーラシア大陸の共時性に対する関心は、より後の時代のものが中心となっている。これは「世界史 A」という科目が古代よりも近代を重視するために生じた傾向だと考えられる。

(2)『市民のための世界史』の記述

ここで、高校教科書と対比するために、大学教養課程の世界史教科書である『市民のための世界史』も取り上げ、その特徴を同様の観点から見ておきたい[5]。

---

[3] 柴田三千雄・佐藤次高・近藤和彦・岸本美緒 2011。
[4] 柴田三千雄・木谷勤・近藤和彦ほか 2011。
[5] 大阪大学歴史教育研究会編 2014。

a.）「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」はゴチック体で書かれており、重要視されているようである。また、第8章「近代化の広がり」では「パクス・ブリタニカ」の用語が使用されている。しかし、「ローマの平和」については「（ローマ帝国の）支配下の繁栄を恩恵ととらえて「ローマの平和」と呼ぶことがある」（括弧内筆者）と述べられており、そうした慣用表現の一面性に対して留保文言が付け加えられている。

b.）帝政期ローマの社会や経済、文化にも言及されており、属州の状況にも触れている。また、当時の社会を理解するための手助けとなるコラムもある。

c.）第2節の「遠距離の移動と交流」で、ローマ・インド間の海上貿易が言及されている。

これを高校世界史の教科書と比較してみたい。『市民のための世界史』は「ローマの平和」という言葉を比較的重要視しているようである。しかし、「ローマの平和」という言葉に積極的な意味を見出す姿勢がみられない点は、高校世界史の教科書とも共通している。また、ローマ帝国の社会状況がより詳しく述べられ、紀元初期のユーラシア大陸の共時性についてもより意識されている。これらの点から、『市民のための世界史』は高校世界史の教科書よりも比較的古代を重視し、特に古代におけるヨコのつながりを意識する姿勢が見出せると言うことができるだろう。

(3) 教科書の方針と問題設定

以上の検討をもとに、本論の問題設定を行いたい。

まず、現行の教科書記述においては、「ローマの平和」という概念にさほど重きが置かれておらず、絶対視されていないことが指摘できる。では、それはどのような研究動向を反映しているのか。この点については第2章で検討する。

次に、「ローマの平和」によって一定の繁栄がもたらされた、という記述は、いずれの教科書にもある程度共通するものであった。一定の繁栄の具体例として、交易・都市・文化などが挙げられていたが、それらの実態は、最新の研究成果からはどのように描けるのだろうか。この点は第3章で検討する。

最後に、いくつかの教科書では、「ローマの平和」期のローマ帝国がユーラシア大陸の東西交流に参加していたことが触れられていた。同時代のユーラシア大陸全体を視野に入れたとき、「ローマの平和」はどのように描けるのか。これについては第4章で検討する。

第2章　「ローマの平和」の意味と評価

(1) ローマ帝国への関心の移り変わり

第1章では、現在の高校世界史教科書において「ローマの平和」という概念がそれほど重要視されておらず、また絶対視されていないということを述べた。これはどのような研究動

向を反映しているのだろうか。本章ではこの点について考察する。その前提として、以下ではローマ帝国への関心がどのように移りかわっていったのかを時代ごとにまとめてみたい。

ヨーロッパにおいては、すでに中世段階からローマ帝国に対する関心が存在していた。特に注目されたのは、その権威の表象方法だった。ヨーロッパの権力者たちは、ローマの建築を模倣し、自らの権力の正統性を示すために利用していた[6]。そのようなローマ帝国の文化に対する関心は、古典古代を模範とするルネサンスの時代を経てより高まった。

しかしながら、古典文化の代表として重視されたのは、ローマよりもむしろギリシアの方だった。ローマ帝国は、自由や市民的平等といったギリシア的価値観が潰えた末に滅んだ国として認識され、特にその政治に関しては、あまり好意的な評価はなされなかった。そのため、ローマ帝国は専ら「大国の衰退・滅亡」の代表例として認識され、その衰退期を描いた多くの書物が出版されたのである[7]。

19 世紀になると、ローマ帝国のとらえ方が徐々に変化していった。当時は帝国主義の時代であり、帝国の先駆としてのローマに関心が集まったためである。衰退期だけでなく拡大期や安定期も注目されるようになり、関心の幅が広がった。このころの研究は、ローマ帝国の支配や領土拡大を正当化するものが多く、結果としてローマ帝国の評価はより好意的なものとなった[8]。

しかし、このころに形成されたローマ帝国のイメージは、1970 年代以降ポスト＝コロニアリズムの時代に批判を受けた。近代に確立したローマ帝国の積極的な評価には、帝国主義的価値観が色濃く反映されているということが明らかにされたのである。すなわち、帝国主義の時代にヨーロッパの研究者たちがローマ帝国の拡大や異民族の支配を正当化したのは、帝国主義勢力として他者を支配する自分たちを正当化しようという意図があったためだと指摘されたのである[9]。

このような指摘を受け、20 世紀後半からは、近代に形成されたローマ帝国像を相対化しようとする研究が行われはじめた。これまでのローマ帝国内部、それもイタリア半島を中心としてきた研究を反省し、帝国内の辺境や帝国外の視点からローマ帝国を見直そうという動きが出てきているのである[10]。

(2)「ローマの平和」の評価の変遷

このようにローマ帝国への関心が移りかわる中、「ローマの平和」という概念に対する評価はどう変わっていったのだろうか。

---

6 長谷川 2006、26-28 頁；長谷川 2010、12 頁。
7 南川 2003a、26 頁。この時期に書かれた作品の例が、後述するエドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』である。
8 長谷川 2001、52-55 頁；長谷川 2010、12 頁。
9 長谷川 2010、12-13 頁；南川 2003a、50-55 頁。
10 長谷川 2001、55-64 頁。そのような研究の例として、日本では、帝国最北部の属州ブリタニアに注目した南川 2003a が挙げられる。

そもそも「ローマの平和」と言われる時代に生きた人々の間でも、当時のローマ帝国が平和か否かについて統一的な見方が存在したわけではなかった。その例として、二人の人物の言葉を紹介したい。まず、詩人のアリスティデスが『ローマ頌詞』の中で書いたものである。

> まるで祭りを祝うように、全世界が古くからの重荷である鉄〔製の武器〕を置き、能力を挙げて身を飾ることやありとあらゆる楽しみに取り組んだ。（中略）あらゆる所に、体育訓練所・噴水・前庭・神殿・仕事場・学校があふれており、言わば原始時代から病んでいた世界が回復したと、正しい知識でもって言うことが出来る。[11]

アリスティデスは、このように、争いがなくなり、人々が快楽を享受できるようになったとして、この時期のローマ帝国の支配を褒め称えている。これに対し、タキトゥスの『アグリコラ伝』ではまったく異なる「ローマの平和」像が描かれている。

> 世界の略奪者〔たるローマ人〕たちは、全てを荒らしまわって陸地を見捨てた後に、今や海を探し求めている。（中略）略奪し殺戮し強奪することを、偽りの名前で支配と呼び、無人の野をつくると平和と呼ぶ。[12]

タキトゥスはアリスティデスと異なり、ローマ帝国による「平和」は見せかけに過ぎないとして痛烈に批判している。古代においても紀元初期のローマ帝国が平和かどうかという点について見解の不一致が見られたのである[13]。

それでは、ローマ帝国が滅亡した後の時代において、「ローマの平和」はどのように考えられていたのだろうか。先述のように、近代以前においては、ローマ帝国はギリシア的な自由が潰えて皇帝独裁となり滅亡した国とされており、高い評価は受けていなかった。そのため、紀元初期の「ローマの平和」は、偶然優れた皇帝が連続して即位したために生じた例外的な繁栄期ととらえられていた[14]。

18 世紀イギリスの歴史家エドワード・ギボンは、「ローマの平和」の最盛期である五賢帝期を非常に高く評価したことで知られている[15]。しかし、彼が五賢帝を称えた『ローマ帝国衰亡記』の主眼は、その名の通りローマ帝国の衰亡を描くことであり、「ローマの平和」が例外的な時期だという認識が変化したわけではなかった。それでも、彼の著作によって賢帝の下で繁栄した理想的な時代という「ローマの平和」像が定着することになった[16]。

19 世紀に入り、ローマ帝国が高く評価されはじめると、「ローマの平和」には新たな意味

---

11 歴史学研究会編 2014、293-294 頁。
12 同上、293 頁。
13 伊藤・本村編 1997、159-160 頁。
14 南川 2003a、26 頁。
15 ギボンは五賢帝期を「世界史にあって、もっとも人類が幸福であり、また繁栄した時期」と表現している（南川 1998、17-18 頁）。
16 同上、19 頁。

が付与された。帝国主義の時代には、ローマ帝国の拡大や支配を正当化するような研究が相次いだというのは前述の通りであるが、「ローマの平和」の理解もこれらの正当化と密接に結びついていた。

当時の通説では、ローマ帝国の拡大は帝国自身が意図したものではなく、あくまでも帝国を脅かす外敵を打倒した結果として生じたことにすぎないとされた。ローマ帝国が領土を拡大するきっかけとなった戦争は、すべて帝国の敵対勢力の側から仕掛けたものであり、帝国はそれを受けて立ったにすぎないと理解されていたのである。したがって「ローマの平和」とは、帝国周辺の外敵を概ね討ち果たし、さらには辺境軍の整備により新たな異民族の侵入が抑止されるようになった結果訪れたものととらえられた[17]。加えて、この時期にはローマ文化が帝国全土に広まり、被支配民が「ローマ化」されたという主張もなされた。帝国が数百年に渡りその領土を維持し得た理由はこの点に求められ、この点にこそローマ帝国による支配の世界史的意義があったと評価されたのである[18]。

しかし、前述の通り、ポスト＝コロニアリズムの時期になるとローマ帝国の拡大や支配の正当性について多数の批判が寄せられるようになった。ローマ帝国は自己防衛のためだけに戦争を行ったわけではなかったし、自分から戦争を引き起こすこともあったと指摘されはじめたのである。そのため、外的脅威が消失したことで平和が訪れたという単純な「ローマの平和」像は転換を迫られた。帝国内が一律に平和で戦争がなかったという理解は否定され、「ローマの平和」という表現が帝国のプロパガンダ的な側面を持っていたとも言われるようになった[19]。また、ローマ帝国の被支配民が平等にローマ文化を受け入れ「ローマ化」したという主張も退けられた[20]。平和の享受もローマ文化の受容も、地域や個人の立場によって差異があることが主張されるようになったのである。ローマ帝国の支配下で繁栄を享受できたのは、その文化、すなわち都市文化を受け入れた者だけであり、それを拒否する者にとってはそれほど幸福な時代ではなかったというのが、現在の学界で広く受容されている「ローマの平和」のイメージと言えるだろう[21]。

以上見てきたように、現在の研究では「ローマの平和」という概念は絶対視されず、個々の立場による状況の違いが意識されるようになっている。第1章で見たように、現在の教科書で「ローマの平和」という概念にそれほど重きを置かず絶対視しないのは、これらの研究を受けてのことと考えられる。では、ローマ帝国の繁栄した部分とは一体どのようなものだ

---

17 長谷川 2001、53-55 頁；長谷川・樋脇 2004、149-150 頁。
18 長谷川 2001、66 頁；長谷川・樋脇 2004、150-151 頁；服部編 2006、122-123 頁。
19 長谷川 2001、64 頁；長谷川・樋脇 2004、150 頁；長谷川 2010、16-17 頁。「ローマの平和」の時期に戦争が少なくなったように見えるのは、戦争への関心が薄れ、戦争が起こっても記録されなくなったからだという指摘もある。
20 「ローマ化」の概念を批判する動きは、1990 年代から、特に考古学者を中心に起こった。その背景には、エドワード・サイードの影響があるとされている（南川 2003a、22-23 頁；南川 2003b 、68 頁）。
21 古山・本村 1998、69 頁。

ったのか。次章では、この点について述べていきたい。

第 3 章　ローマ帝国の安定と繁栄

(1) 都市の繁栄

第 2 章では、「ローマの平和」が絶対視されなくなるまでの研究動向の変遷を述べた。現在では、帝国内での一律の平和や繁栄は否定されているが、「ローマの平和」期のローマ帝国がその最盛期を迎えていたことまでもが否定されたわけではない。前章に引き続き、本章でも都市に着目し、ローマの「繁栄」の姿を描いてみたい。

ローマ帝国の都市は、帝国による属州支配の拠点であった。都市は帝国内で特権的な地位を得ており、都市を中心として属州は発展したとされる[22]。都市において統治業務を担当したのは、ローマ帝国の支配下に入る以前からその地域を支配していた領主たちであった。彼らはローマ帝国の支配下に入ることと引き替えに、帝国の威信を背景として支配を強化した。また、ローマ市民権を得て「ローマ人」となり、属州の支配者からさらに高い地位に上り詰めることもできた。ローマの社会は流動性が高いことが特徴で、機会さえあれば帝国全体の支配層である騎士身分や元老院身分に加わることも可能であった。属州出身者が皇帝の地位に上り詰めることさえあり得たのである[23]。このように、都市有力者たちは積極的に「ローマ人」となることで大きな利益を得ていたと言える。

この都市有力者たちは、広大な農村を支配する大土地所有者でもあった。彼らが農村から徴収した税金は都市で消費されたため、ローマ帝国の都市は「消費都市」となった[24]。ただし、都市の有力者たちは自らの楽しみのためだけに消費を行ったわけではない。彼らの消費は、自らの支配の正当性を示す手段でもあった。当時のローマ帝国では、支配者に必要な資質として「慈愛」が求められた。支配者が自らの「慈愛」の資質を示す最も端的な方法が、都市に公共施設を建設することであり、都市民に「パンとサーカス」と称される食糧と娯楽を提供することであった[25]。彼らはローマ市を模範に公共施設を建設したため、各地の都市は円形闘技場や劇場など共通の施設を持つことになった。また、有力者による食糧の提供によって、都市民は帝国内ならどこでも同様の施しを受けられるようになった。こうして、ローマ帝国内の都市民たちは貧民でも都市生活の恩恵を享受できるようになったのである。このことは、ローマの貧民たちにまで自分たちが「ローマ人」であるという自覚を持たせるこ

---

[22] 南川 2013、25-26 頁。
[23] 同上、32-36 頁。たとえば、帝国の最大版図を達成した皇帝トラヤヌスはイベリア半島の属州出身だった。
[24] 弓削 1989、79-83 頁；浦野 2002、191-193 頁。
[25] 本村 1997、142-150 頁。都市におけるこのような施与行為は、近年では「エヴェルジェティズム」という概念で表される。

とになった[26]。南川高志は、このようなローマ帝国内住民の「ローマ人」としての自覚こそ、紀元初期にローマ帝国が安定した要因だと述べている[27]。

以上、「ローマの平和」期においてローマ帝国内の都市住民が置かれていた状況を見てきた。この時期でもローマ帝国の住民の大部分は農村で農業に従事し、貧しい生活を送っていたことは言うまでもない。また、都市の住民もその大半は貧民だった。彼らは食糧の配給でなんとか最低限の生活を営むことが出来ていたにすぎず、決して余裕のある暮らしとは言えなかった。このことから、「ローマの平和」の時期に繁栄を享受できたのは、都市のごく一部の富裕層、すなわち都市有力者だけと言うことができるだろう[28]。

(2) ローマ帝国の経済活動

第1節で見たような都市の発達に刺激され、ローマ帝国では「ローマの平和」期に交易発展のピークに達した。本節では交易に着目し、ローマ帝国の「繁栄」を描いてみたい。交易の重要性については、これまで多くの見解が示されてきた。以下ではまず、ローマ帝国の経済活動についての研究史を概観したい。

ローマ帝国における経済活動をどうとらえるかということは、ローマ史研究の一大テーマである。特に19世紀後半から20世紀半ばにかけては、この点をめぐって研究者の間で大規模な論争が展開された。しかし、これらの議論は経済的合理性や利害で動く人々の存在などを前提としていた[29]。そのため、ローマ帝国像が徹底的に見直されることになった1970年代以降からは、そうした近代的な価値観を古代に当てはめることへの批判が行われはじめた。その結果、古代における大規模な商業や産業合理化の姿勢を否定する説が定着した。ローマ帝国の経済の中心はあくまでも農業であり、交易は必要最小限しか行われない自給自足的な社会だったと理解されるようになったのである[30]。

しかし、この定説についてもすぐさま修正が加えられた。主に考古学的な成果により、ローマ帝国が農業中心社会であったことは認めつつも、技術改良や投資といった活動による産業合理化が進められていたことが指摘されたのである。その例として、水車の使用が拡大していったことが挙げられる。また、ポンペイの郊外で発見された大量の葡萄酒やオリーブ油が示すように、交易を目的として生産が行われていたということも明らかになってきている[31]。こうして現在では、ローマ帝国の交易は、輸出用商品の生産が行われるような大規模なものであったと見なされているのである。

---

26 長谷川・樋脇 2004、152-170頁；長谷川 2006、38-42頁。
27 南川 2013、38-49頁。
28 弓削 1989、58-60頁、79-90頁；長谷川・樋脇 2004、304-306頁。
29 このような主張の例として、ローマの経済活動を都市に注目して高く評価したミハイル・I・ロストフツェフによるものが挙げられる（伊藤・本村編 1997、169頁）。
30 伊藤・本村編 1997、169-170頁；グリーン 1999、23-24頁。
31 伊藤・本村編 1997、170頁、178頁；グリーン 1999、24-26頁、206-210頁；長谷川・樋脇 2004、310-321頁。

それでは、ローマ帝国の交易の実態はどのようなものだったのだろうか。ローマ帝国の交易は「ローマの平和」の時代に最盛期を迎えた。その背景は多くあるが、帝政期までの戦争によって獲得した領土が広大な経済圏となったこと、一定の平和によって交易路が安定し、また人口が順調に増加したことなどが主な要因として挙げられるだろう[32]。

ローマ帝国の交易活動は、帝国内交易と帝国外交易に大別される。帝国内交易は、主に地中海など海上輸送を中心として行われた。その交易品は、北アフリカの小麦・オリーブやイベリア半島の葡萄酒など、必需品がほとんどで、ローマ帝国の交易の大半を占めた。一方の帝国外交易は、都市の富裕者向けの奢侈品が中心だった。ヨーロッパ北部に住むゲルマン人との琥珀の取引も存在したが、やはり交易量が多いのはインドや中国などを取引相手とする東方貿易だった。インドの香辛料や真珠、さらには中国の絹などが陸路や海路を通じてローマ帝国内に運び込まれていた[33]。

以上述べたように、「ローマの平和」期のローマ帝国は都市を中心に発展していた。都市の有力者が自分自身や被支配民のための大規模な消費を行ったため、ローマの都市は「消費都市」となった。また、この時期には帝国内外との交易が最盛期を迎えており、ローマ帝国は経済的に繁栄していた。

しかし、ローマ帝国の遠距離交易が栄えるためには、帝国内部だけではなく、ユーラシア大陸全土にまたがる交易ネットワークの総体的な安定が必要である。次章では、遠距離交易を成り立たせた「ローマの平和」に相当する時期のユーラシア大陸の状況について考察する。

第4章　ユーラシア大陸から見る「ローマの平和」

(1) 紀元初期のユーラシア交易ネットワーク

1世紀から2世紀頃、ローマ帝国を含めたユーラシア交易ネットワークは安定しており、草原の道・オアシスの道・海の道といった交易ネットワークを通じて文物や人が盛んに行き来していた[34]。一例を挙げると、中央アジアでは中国の五銖銭やローマ帝国のコインが多く出土している。このことは漢やローマ帝国が交易の対価としてコインを使用しており、交易の中継地である中央アジアにコインが大量に流入していたことを示している[35]。

では、なぜ当該期のユーラシア交易ネットワークは安定していたのか。本節ではユーラシア交易ネットワークを構成する地中海世界・西アジア・アフガニスタンから北西インド・オ

---

[32] 長谷川・樋脇 2004、298-299 頁；向井 2013、152 頁、159 頁。
[33] 伊藤・本村編 1997、177-179 頁；浅香 2003、6-11 頁、19-22 頁；服部編 2006、109-110 頁；向井 2013、153-154 頁。
[34] 浅香 2003、6-24 頁。
[35] ルドヴェラゼ 2011、225-227 頁。

アシス都市・中国（後漢）といった諸地域の状況を概観し、当該期の安定的なユーラシア交易の背景を明らかにする。

地中海世界がローマ帝国による支配のもとで安定していたことは前述の通りである。

西アジアはパルティアの支配下にあった。紀元前1世紀頃からパルティアとローマ帝国は国境を接するようになり、両者はたびたび衝突した。しかし、「ローマの平和」期にあたる紀元後1世紀半ば頃になると、両者の関係は良好なものとなった。1世紀後半になると内乱が頻発したことによりパルティアの支配は不安定なものとなり、西アジアにおいてもローマ帝国の影響力が拡大した[36]。

アフガニスタンから北西インドにおいては、クシャン朝がバクトリア、ガンダーラへ進出しシルクロードの中央部を支配した。クシャン朝は1世紀半ばから強大化し、2世紀半ばに全盛期を迎えたとされる[37]。

オアシス都市は、経済的提供と引き替えに匈奴の軍事権力による安全保障を得ることで成り立っていた。当該期には一時的に後漢による支配も受けたが（「西域経営」）、基本的には匈奴との関係を保ちつつ自由な交易を行う安定したものであったと言える[38]。

中国では、後漢の支配が安定期を迎え、人口増加によって消費が拡大していた[39]。また、対外的には後漢は匈奴の王朝と共存・通婚関係を構築していた。1世紀半ば頃には匈奴が南北に分裂するが、このうち南匈奴は後漢に臣属し、後漢の辺境防衛を請け負った。後漢は対外関係においても比較的安定していたと言える[40]。

以上のように、紀元初期のユーラシア大陸の諸勢力は全般的に安定した状態にあったことがわかる。このことこそ、ユーラシア交易ネットワークの安定の背景だったのである。では、以上のような大陸全体の共時的な安定状況は、地域ごとの個別的な安定が偶然一致しただけだったのだろうか。この点について、次節で詳しく検討しよう。

(2) 環境史から見る「ローマの平和」とユーラシア大陸

前節で述べたように、「ローマの平和」と呼ばれた時代はユーラシアの諸地域が比較的安定していた時代であり、その背景としては地域ごとの個別的な要因が考えられてきた。しかし、諸地域が共時的に安定期に入ったことへの注目は、すでに20世紀前半から存在していた。SF作家でもあるH.G.ウェルズは、ローマと漢という二つの大帝国の同時代性について説明を加えている。また、宮崎市定は西アジアの文明が東西に伝わったことにより、同時代的に類似する帝国ができたことを示唆した[41]。こうした見解を前提としつつ、近年では主に気候

---

36 足利1977、211-226頁；長澤1993、158-160頁。
37 足利1977、238-240頁；長澤1993、152-156頁。
38 杉山2003、175-176頁。
39 殿村1977、71-72頁；ロベール1996、14頁。
40 杉山2003、185-200頁。
41 本村・鶴間1998、31頁。

変動に着目した環境史の成果によって、広範な地域における歴史的共時性が再評価されつつある。

ジャレド・ダイアモンドは『銃・病原菌・鉄』の中で、「歴史は、異なる人びとによって異なる経路をたどったが、それは、人びとの置かれた環境の差異によるものであって、人びとの生物学的な差異によるものではない」とし[42]、科学分野の研究の発達により、現段階では環境を規定する地理的要因を用いて歴史を説明することが可能になっていると述べている[43]。

また、高校世界史の副教材である『最新世界史図説　タペストリー　五訂版』で「歴史と気候変動・開発と環境の歴史」が特集され[44]、福井憲彦の『歴史学入門』では環境について1章が充てられる[45]など、歴史教育においても環境史が取り入れられるようになってきている。

こうした動向を踏まえて、本節では環境史の観点からユーラシアの諸地域が共時的に安定した要因を考える。そのために、まず環境史において用いられる方法論を示す。次に、「ローマの平和」の時代に該当するサブアトランティック期と呼ばれる環境史の枠組みについて説明する。そのうえで、古代ローマおよび諸地域が安定した気候要因を示す。以上の手順で、環境史を通してみるユーラシア諸地域の共時的な安定の背景を示したい。

まず、環境史の方法論であるが、朝倉正・高橋浩一郎著『気候変動は歴史を変える』では、過去の気候を測定するための方法として以下のようなものが示されている[46]。

① 気象測器による観測結果を集める
② 古文書に載っている天気の記録
③ 木の年輪
④ 酸素の同位元素の割合
⑤ 炭素の同位元素の割合
⑥ 泥の層状構造分析
⑦ 万年雪の層状構造分析
⑧ 花粉分析

①は19世紀半ば以降、北半球を中心に設置された気象測器によって気候を分析する方法である。この方法で18世紀頃まで遡ることができる場所もある。②は古文書に書かれている天気の記録、湖や川などの水位や結氷の記録、農作物のでき具合の記録、花の開花の期日などの記録を参考とする方法である。①と②を照合することで、ある程度量的な過去の気候を知ることが可能とされる。③は木の年輪の幅から気候を推測する方法である。気候が良いほど年輪の幅が広くなるとされ、そこから気候が想定される。日本は気候変動が複雑であるためこの方法の適用は難しいが、気候が比較的安定しているヨーロッパやアメリカでは有効

---

42 ダイアモンド2000、35頁。
43 同上、35-36頁。
44 川北・桃木監修2007、272-273頁。
45 福井2013、25-39頁。
46 朝倉・高橋1994、15-17頁。

な方法と考えられている。アメリカのカリフォルニアでは、古木によって紀元前 3000 年頃の気候まである程度推定できるという。

④はノーベル賞受賞者であるユーリが開発した酸素 O_2 同位元素の割合を用いて調べる方法である。酸素には原子量 18、17、16 の 3 種類があり、酸素を含む水（H_2O）は酸素原子の原子量によって蒸発速度が異なる。そのため、雨や雪、氷を採取し、その水の中の原子量の異なる酸素の割合を調べることで、蒸発する前の水の温度が推定できる。⑤は原子量 12 と 14 の炭素の割合を調べることで、炭素となった植物が死んだ時期を推定できる。この方法で 1 万 2000 年前までの気候が推定されるという。

⑥は湖の底に堆積した泥の層状構造から降水量を推測する方法である。沈澱層が厚いほど川から流れ込んだ水の量が多く、ひいては降水量が多かったことが想定できる。⑦は万年雪にできた層状構造から降水量を推測する方法である。乾期にはちりなどが積もるため、年ごとの降水量が推測できる。⑧は花粉の化石から木の種類を推定し、その木の種類から気候を推定する方法である。

同著ではこれらの主要な方法に加えて、海岸線の位置の変化から気候を推定するなど、他にも特殊な方法があることが述べられている。

次に、サブアトランティック期について説明したい。サブアトランティック期（「温暖期後」）は、大きく二つに分けられる。サブアトランティック期 I は紀元前約 800～紀元 100 年の温暖期後の前半であり、サブアトランティック期 II は紀元 1300～2000 年の温暖期後の後半である。

ここでは、「ローマの平和」期が含まれるサブアトランティック期 I について取り上げる。サブアトランティック期 I が始まると、平均気温が 1～2 度下がり降水量は著しく増加した。降雪量が増え、氷河が成長し、高地の牧草地は失われ、アルプス山間の居住地は衰退した。水位が上昇し、水辺近くの居住地は移動を強いられた [47]。

このサブアトランティック期 I の末期がローマ帝国の時代であり、温暖化の兆しが見え始めたのがアウグストゥスの治世（在位紀元前 30～紀元 14 年）であった。そして、「ローマの平和」と呼ばれる紀元前 1 世紀末頃から紀元後 2 世紀頃こそ、比較的温暖でかつ乾燥しすぎてはいないという気候的に非常に良好な時期にあたるのである。この時期は「ローマの気候最良期」と称される。

温暖な気候はローマ帝国内における農業に影響を与えた。北イタリアでもオリーブ栽培が可能になり、北アフリカはローマ帝国の「穀倉地帯」となった。また、ブドウ畑がフランスまで広がり帝国内のワインが生産過剰になったため、1 世紀後半にローマ皇帝ドミティアヌスが勅令を発し、アルプス以北の植民地におけるワインの生産禁止措置がとられたという記録も残っている [48]。このほかにも、温暖化により年間を通じてアルプス越えが可能になったことは、帝国が北方の領域を支配できた一因であるとされている [49]。

---

[47] ベーリンガー2014、82-85 頁。
[48] 田家 2010、42-143 頁。
[49] 同上、88 頁。

古代の最良気候はローマだけでなく、ヨーロッパから中東を経て東アジアにかけて大国の成立を助長した[50]。中央アジアでの降水量が増え、遊牧民の生活が向上し、シルクロードの中継地点となったオアシス都市が発展した。これによりシルクロードは紀元前150年頃から紀元300年までの間活況を呈したのである。その後東西交易が衰退していく時期は、寒冷化によって内陸部で干ばつが発生するようになる時期と一致する[51]。

なお、同時代の中国やインドに関する環境史的研究は、管見の限りあまり進められていないようである。しかしながら、今回参照した文献に加え、フェイガン[52]の研究などを見ても、21世紀に入ってからの環境史の進展はめざましいものがある。今後両地域に関する環境史的研究がなされるのも時間の問題であろう。

本章では《ユーラシア大陸全体のなかのローマ帝国》という視角をもとに、「ローマの平和」期における帝国の「繁栄」が、いかなる世界史的状況のなかで存在していたのかを検討した。第1節では、ユーラシア大陸交易ネットワークを担う諸地域の状況を検討し、各地域で大勢力による安定的な支配がなされていたこと、その結果として活発な遠隔地交易がなされていたことを明らかにした。第2節では、環境史の成果に基づき、そうした大陸全土の安定的状況の要因を、「ローマの気候最良期」と称される当該期の温暖な気候条件に求めた。

環境史は発展途上の分野であるため、気候条件を示す史料、そしてその研究ともに十分とはいえない。しかしながら、気象観測技術の進歩とともに環境史研究は飛躍的に進展している。今後本章で述べたような古代のユーラシアの安定についての研究が進展することで、「ローマの平和」はより相対化されていくことになるだろう。

おわりに

最後に、本稿の問題設定への答えをまとめよう。本稿では「ローマの平和」という言葉に含まれている価値観を相対化し、ユーラシア大陸の一部としての「ローマの平和」像を提示することを目的とした。そのために、教科書比較（第1章）、「ローマの平和」の意味と評価の検討（第2章）、ローマ帝国の安定と繁栄の実態についての検討（第3章）、それからユーラシア大陸から見る「ローマの平和」についての検討（第4章）を行ってきた。

世界史Aの教科書記述比較においては、必ずしも「ローマの平和」という用語が絶対視されていないことが明らかになった。多くの教科書ではローマ帝国の支配による「平和」というよりも、地図を含むヴィジュアル資料を用いてユーラシア大陸の安定を背景とする東西交流について説明しようとする意図が見られた。また、「ローマの平和」の時代を通してローマ帝国が一定の繁栄を見せたという評価は概ね共通していた。

---

50 ベーリンガー2014、89頁。
51 田家2010、144頁。
52 フェイガン2001、2005

このような教科書記述の背景には、「ローマの平和」の意味と評価の移り変わりがあった。特に帝国主義の時代にローマ帝国の歴史が好意的に語られるようになり、帝国主義国家にとって都合がいいように「ローマの平和」が解釈されるようになった。この反省を踏まえて、ポスト＝コロニアリズム以降はローマ帝国を相対化する試みが盛んになった。現在の教科書記述も、こうしたローマ帝国を相対化する試みが反映されているといえよう。

では、相対化される中で明らかになったローマ帝国の安定と繁栄はどのようなものであったのだろうか。ローマ帝国は都市を中心に発展し、その恩恵を受けた人々が「ローマ人」という自覚を持つことで安定的に存続した。また、帝国内外との交易により、ローマ帝国は経済的な繁栄を見せた。しかしながら、その繁栄を主に享受したのは支配者階級であった都市有力者ら富裕層のみで、万人が平等にその恩恵に浴したわけではなかった。

近年こうしたローマ帝国の相対化に加えて、ユーラシア大陸規模で「ローマの平和」を考える試みがなされている。ユーラシア大陸規模で考えると、ローマ帝国は東西交流のネットワークを構成する地域のひとつであった。ローマ帝国が支配した地中海世界と同様に、西アジア・アフガニスタンから北西インド・オアシス都市・中国（後漢）も一定の安定を見せたために東西交流が可能になった。この広範囲に及ぶ地域が共時的に安定した要因として、地球規模での温暖化が考えられる。

以上のように、ローマ帝国の内部と外部からローマ帝国を相対化することにより、今後どのような教科書記述が求められるだろうか。ひとつは、ローマ帝国内部の視点から見ると「ローマの平和」を享受できた地域や人の立場、繁栄の内容を明らかにすることが求められるだろう。また、ローマ帝国外部、すなわちユーラシア大陸規模で見ると、同時代のユーラシア大陸全体におけるローマ帝国の立ち位置を意識する書き方が求められるように思われる。特に技術の進歩によって明らかになる環境史の台頭によって、古代のグローバルな歴史が再考される必要性が今後ますます大きくなるだろう。

参考文献

第１章

大阪大学歴史教育研究会編
　2014　『市民のための世界史』、大阪大学出版会

岡田勝世・近藤一成・伊藤定良ほか
　2014　『明解　新世界史Ａ　新訂版』、帝国書院

柴田三千雄・佐藤次高・近藤和彦・岸本美緒
　2011　『現代の世界史　改訂版』、山川出版社

柴田三千雄・木谷勤・近藤和彦ほか
　2011　『世界の歴史　改訂版』、山川出版社

向山宏・秋田茂・石井修ほか

2014　『改訂版　世界史A』、第一学習社

第2章

伊藤貞夫・本村凌二編
1997　『西洋古代史研究入門』、東京大学出版会
桑山由文
2004　「2世紀ローマ帝国の東方支配」、『西洋古代史研究』4
長谷川岳男
2001　「ローマ帝国主義研究――回顧と展望」、『軍事史学』37-1
2006　「表象の帝国――ローマの「幻影」の起源」、歴史学研究会編『幻影のローマ――「伝統」の継承とイメージの変容』、青木書店
2010　「ローマ帝国を捉え直す――古代と現代との対話」、『歴史地理教育』756
長谷川岳男・樋脇博敏
2004　『古代ローマを知る事典』、東京堂出版
服部良久編
2006　『大学で学ぶ西洋史〈古代・中世〉』、ミネルヴァ書房
古山正人・本村凌二
1998　「地中海世界と古典文明」、本村凌二編『岩波講座世界歴史 4　地中海世界と古典文明』、岩波書店
南川高志
1998　『ローマ五賢帝――「輝ける世紀」の虚像と実像』、講談社
2003a　『海のかなたのローマ帝国――古代ローマとブリテン島』、岩波書店
2003b　「古代ローマ帝国と近・現代ヨーロッパの自己理解」、谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』、山川出版社
歴史学研究会編
2012　『古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店

第3章

浅香正
2003　「ローマ世界と東方貿易」、同監修『ローマと地中海世界の展開』、晃洋書房
伊藤貞夫・本村凌二編
1997　『西洋古代史研究入門』、東京大学出版会
浦野聡
2002　「ローマ帝政期、都市の経済生活――歴史人口学などからの一試論」、『西洋史研究』31
グリーン、ケヴィン（本村凌二監訳・池口守他訳）
1999　『ローマ経済の考古学』、平凡社

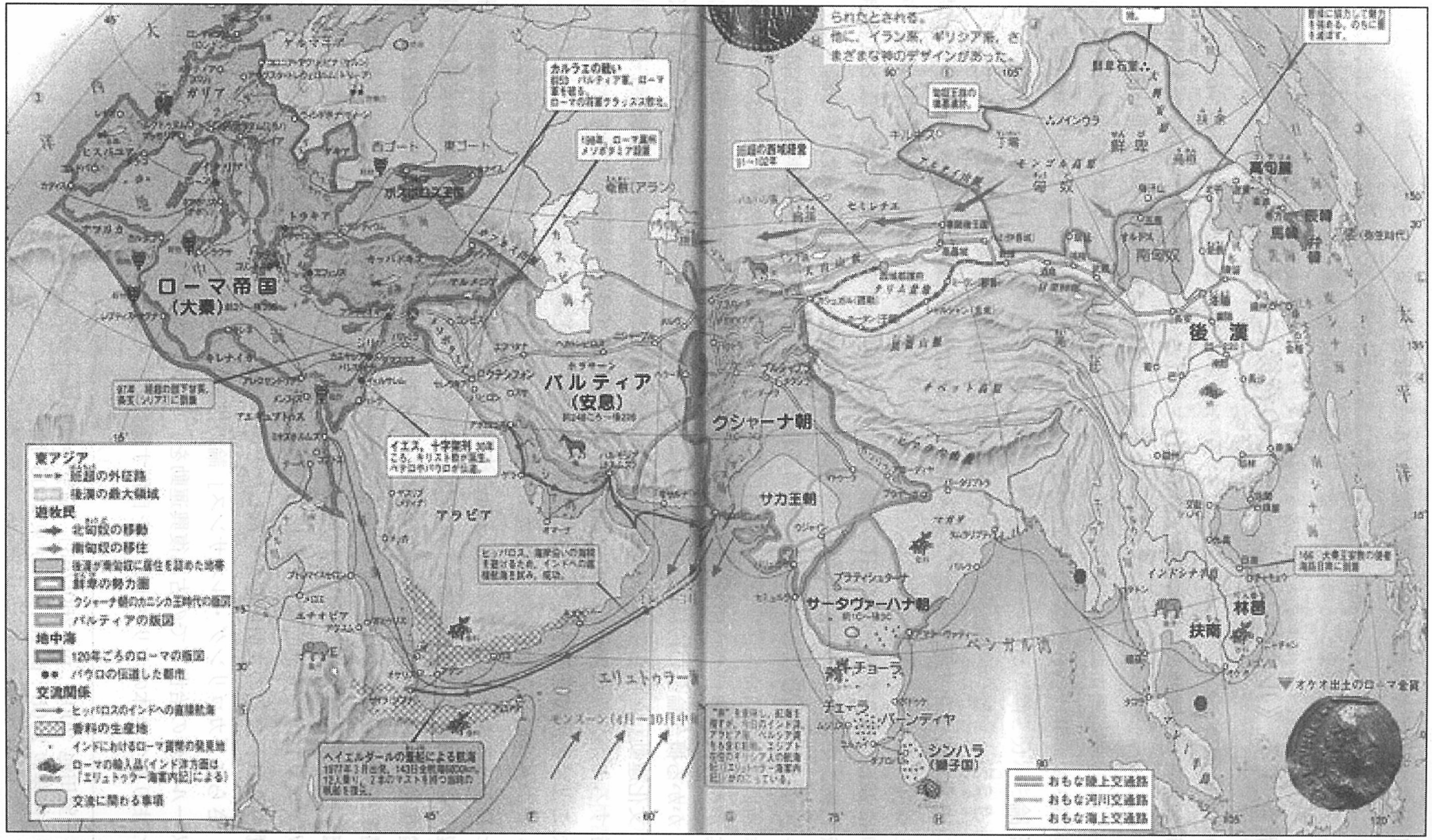
長谷川岳男・樋脇博敏
2004　『古代ローマを知る事典』、東京堂出版
服部良久編
2006　『大学で学ぶ西洋史〈古代・中世〉』、ミネルヴァ書房
古山正人・本村凌二
1998　「地中海世界と古典文明」、本村凌二編『岩波講座世界歴史 4　地中海世界と古典文明』、岩波書店
南川高志
2013　『新・ローマ帝国衰亡記』、岩波書店
向井朋生
2013　「地中海を舞台にした古代ローマ帝国経済のグローバリゼーション」、『歴史学研究』911
本村凌二
1997　「遊牧のローマ帝国」、山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』、岩波書店
弓削達
1989　『ローマはなぜ滅んだか』、講談社

第4章

浅香正
2003　「ローマ世界と東方貿易」、同監修『ローマと地中海世界の展開』、晃洋書房
朝倉正・高橋浩一郎
1994　『気候変動は歴史を変える』、丸善株式会社
足利惇
1977　『世界の歴史 第9巻 ペルシア帝国』、講談社
帝国書院編（川北稔・桃木至朗監修）
2007　『最新世界史図説　タペストリー　五訂版』
川又正智
2006　『漢代以前のシルクロード――運ばれた馬とラピスラズリ』、雄山閣
杉山正明
2003（初出：1997）　『遊牧民から見た世界史――民族も国境もこえて』、日本経済新聞社
ダイアモンド、ジャレド（倉骨彰訳）
2000　「ニューギニア人ヤリの問いかけるもの」、『銃・病原菌・鉄　上』、草思社
田家康
2010　「ローマの盛衰とその時代」、『気候文明史――世界を変えた8万年の攻防』、日本経済新聞出版社

殿村晋一
1977 「ヨーロッパ・アジア間貿易のプロトタイプ――ギリシア・ローマの対アジア貿易」、『専修商学論集』22
長澤俊和
1993 『シルクロード』、講談社
福井憲彦
2013 「歴史の舞台としての環境」『歴史学入門』、岩波書店
フェイガン、ブライアン（東郷えりか・桃井縁美子訳）
2001 『歴史を変えた気候大変動』、河出書房新社
フェイガン、ブライアン（東郷えりか訳）
2005 「ケルト人とローマ人――紀元前 1200 年～前 900 年」、『古代文明と気候大変動』河出書房新社
ベーリンガー、ヴォルフガング（松岡尚子・小関節子他訳）
2014 「地球温暖化－完新世」『気候の文化史』、丸善プラネット
ルドヴェラゼ、エドヴァルド（加藤九祚訳）
2011 『考古学が語るシルクロード史』、平凡社
ロベール、ジャン＝ノエル（伊藤晃・森永公子訳）
1996 『ローマ皇帝の使者中国に至る――繁栄と野望のシルクロード』、大修館書店

執筆分担

はじめに：竹中
第 1 章：方
第 2 章：森下
第 3 章：森下
第 4 章（1）：竹中
第 4 章（2）：今泉
おわりに：今泉

[図 1]『最新世界史図説　タペストリー　五訂版』（川北稔・桃木至朗監、2007）10-11 頁より転載